逆問題と 正準変換

名大 理 男玉 裕谷

多序

Soliton 解をもつ、非総形分散型方程式の初期値問題を、exact に解く方法の1つに、連散乱落があることは、よく知られている。 近年、Ablowitz 等"は、連散乱落で解りつる方程式のクラスを、Systematic に議論した。 このクラスには、Korkewag de Vries 方程式、 考形 Kortewag de Vries 方程式、非形形 Schrödinger 方程式等が分まれる。 これられた程式に、共通な、注目すがき性質として、無限们の保存量の存在がある。 とakharov 等 は、このことに関連して、ドdV方程式、非が形 Schrödinger 方程式等。は、定全積分可能な Hamiltonian System であることを示した。 有限自由度 Na Hamiltonian System では、を11に Involutionにある Naの保存量の存在は、表が、定全積分可能であることの以番十分条件である(Liouvilleの定理)、か、ここで、

考えているような無限やえ、表とついては、無限にの保信量の存在は、系が定金積分可能である色の以再条件のみをよえ、一般に、定金積分可能であることを証明することはできない。しかし、定数別問題で解きつるというり生費を用いることで、一般的に、これらの方程式(Ablowits 等。示に、生数記念で解くられてきる方程式)が、定金積分可能であることが示せる。ここでは、定数別 Scheme を Ablowits 等 の提出した 中のを使い、この Scheme から得らりる、非縁形方程式を、 Hawiltoniam System とに 定義し、一般的に、この System が 定全積分可能であることで、このとき 上数記 Scheme は、正準変換であることが、示され、初期値問題は、単に、正準変換の 1 parawuter も の action として考えられる。

多1 Ablowits 等の 散乱 Scheme と 散乱向題.
Potential る(x,t), Y(x,t) モキフ」や記 Dirac 型 Op.
についての数配内題。

$$\frac{\partial \varphi_{1}}{\partial x} + i \xi \, \varphi_{1} = \xi \, (x, t) \, \varphi_{2}$$

$$\frac{\partial \varphi_{2}}{\partial x} - i \xi \, \varphi_{2} = \gamma (x, t) \, \varphi_{1}$$
(1)

で考える。 Ablowitz 等は、 91, 42 (こフェ) ての時間発展を

$$\frac{\partial \varphi_{1}}{\partial t} = A \varphi_{1} + B \varphi_{2}$$

$$\frac{\partial \varphi_{2}}{\partial t} = C \varphi_{1} - A \varphi_{2}$$
(2)

の形で定義し、(1),(2) 式向のintegrability condition そっかって A(xitis), B(xitis), C(xitis) へ向の関係より、るいい についての非部形方程式を得た。 まず、(1)式の数乱向 題を考える為に、次の Jost 函数を定義する。 for neal s

$$f(z,t,\xi) \longrightarrow \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} e^{-i\xi x}$$

$$f(z,t,\xi) \longrightarrow \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \end{pmatrix} e^{i\xi x}$$

$$\Rightarrow (3)$$

$$\frac{g(x,t,\xi) \longrightarrow \binom{0}{1} e^{i\xi X}}{g(x,t,\xi) \longrightarrow \binom{1}{0} e^{-i\xi X}} \quad as \quad x \to \infty \quad (4)$$

このとき、 f、 g は マ、 やのように危わせる。

$$f_{1}(x,\xi) = e^{-i\xi x} + \int_{-\infty}^{x} e^{-i\xi(x-s)} g(s) f_{2}(s,\xi) ds$$

$$f_{2}(x,\xi) = \int_{-\infty}^{x} e^{i\xi(x-s)} \gamma(s) f_{1}(s,\xi) ds$$
(5)

$$g_1(x,\xi) = -\int_{\infty}^{\infty} e^{-i\xi(x-s)} g(s) \mathcal{F}_2(s,\xi) ds$$
 (6)

$$g_2(x,\xi) = e^{i\xi x} - \int_{x}^{\infty} e^{i\xi(x-s)} r(s) f_1(s,\xi) ds$$

マ、 9、9 は い式へ一冷独立な解であるから、

$$f(x,\xi) = a(\xi) \mathcal{F}(\xi) + b(\xi) \mathcal{F}(x,\xi)$$
 (1)

$$\overline{f}(x,\xi) = -\overline{a}(\xi)g(x,\xi) + \overline{b}(\xi)\overline{g}(x,\xi) \qquad (3)$$

と表りすことが可能である。 係な a(き), b(き) は.

$$a(\xi) = W[f:g]$$
 , $b(\xi) = W[g:f]$ (9)

ここで W[f:g] = fig2-figh tia Wronskian を意かす。 Tost 函数 (31,4) a 定義より、 a(s) (a(s)) は 上 (下) 半平面に解析特定可能であることがわかる。

a(5), $\overline{a}(5)$ a 零長は、(1) 式の bound state る意味
1. このとき、没の国係が成立する。

$$f(x, \xi_m) = Cn g(x, \xi_m) \qquad \text{Im } \xi_m > 0 \qquad n=1, -N,$$

$$f(x, \xi_m) = Cm g(x, \xi_m) \qquad \text{Im } \xi_m < 0 \qquad m=1, -N_2$$
(11)

これらの組 か= イスス, b, b, 5m, 5m, Cn, での と、数 乱データと呼ぶ。 ヌ、川ゴより、ことの自係があることが わかる。 (12)

 $a(\xi)\overline{a}(\xi)+b(\xi)\overline{b}(\xi)=1$ tor real ξ

色散乱問題にちりば、かから Potential 8、rをきめることは一色的である。

§ 2. 保存量と散乱データの関係

Potential るいを ここでは特に.

$$(\partial_{x}^{n} g) \cdot (\partial_{x}^{m} r) \rightarrow 0 \quad (\underset{n, m}{\text{2id}} b) \quad \text{as } x \rightarrow \infty$$

とする。 このとき を→ 大で そのような (1) ずの 漸近解を考えることかできる。

$$f_{i}(x,\xi) = exp \left\{-i\xi x + \int_{\infty}^{x} \overline{\Phi}_{i}(s,t,\xi) \, ds\right\} \quad (13)$$

$$\longrightarrow a(\xi) e^{-i\xi x} \quad \text{as} \quad x \to \infty$$

すなりち.

$$\ln a(\xi) = \int_{-\infty}^{\infty} \Phi_{i}(s,t,\xi) ds \qquad (14)$$

同様に、

$$\frac{1}{\sqrt{2}}(x,\xi) = -exp\{i\xi x + \int_{-\infty}^{x} \Phi_{2}(s,t,\xi)ds\} (15)$$

$$\rightarrow -\bar{\alpha}(\xi)e^{i\xi x} \quad \text{as } x \rightarrow \infty$$

:
$$\ln \bar{a}(\xi) = \int_{-\infty}^{\infty} \bar{\Phi}_{2}(s,t,\xi) ds$$
 (16)

一方,(2) 式上り 重, 至2 について、次式を得る

$$\frac{\partial}{\partial t} \Phi_1 + \frac{\partial}{\partial x} \left(-A - \frac{B}{g} \Phi_1 \right) = 0$$

$$\frac{\partial}{\partial t} \Phi_2 + \frac{\partial}{\partial x} \left(A - \frac{C}{F} \Phi_2 \right) = 0$$

$$(18)$$

ま、て、(19)、(18) 式の 本2項目の 積分が 零であまならば、(14)、(15) は 保存量であることがわかる。 (13) 式を(1)式に行入して、 Potential a 頃で 保存量を表りすと、

$$\underline{\Phi}_{i}(x,t,\xi) = \frac{1}{2i\xi} \left\{ \underline{\Phi}_{i}^{2} + 8\frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{1}{8} \underline{\Phi}_{i} \right) - gr \right\} \quad (19)$$

こりより、虫をちの近中で展開して

$$\overline{\Phi}_{i}(x,t,\xi) = \sum_{n=1}^{M} \frac{\phi_{i}^{(n)}(x,t)}{(2i\xi)^{n}} \qquad (20)$$

ン欠の recursion tormula E 稱る。

$$\phi_{i}^{(R+1)} = g \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{1}{g} \phi_{i}^{(R)} \right) + \sum_{q=1}^{R-1} \phi_{i}^{(q)} \phi_{i}^{(R-2)}$$
(21)

このとき保存星は、例えば、

$$I_{1}^{(1)} = -\int g r \, dx \qquad , \qquad I_{1}^{(2)} = -\int r g_{x} \, dx \qquad (22)$$

$$I_{1}^{(3)} = \int (g^{2} r^{2} - g r_{xx}) \, dx \qquad I_{1}^{(4)} = \int (3g^{2} r r_{x} - g r_{xxx}) \, dx$$

$$I_{1}^{(k)} = \int \varphi_{1}^{(k)}(x, t) \, dx \qquad (23)$$

更2に肉して同様に計算すると I((e)= I2 であることが、

ただちにりかる。 ヌ (22)の積分が存在することは明らか。

多3 Hamiltonian System Elての非形形方程式 次のようた Hamiltonian System を定義する。

$${}^{2}_{t} = \{ 8, H \} , r_{t} = \{ r, H \}$$
 (24)

Hは、前節で求めた 保存量 I によって表めて43。2. {,}は Poisson bracket E表的し、やのように定義さ43。

$$\{u,v\} = i \int_{-\infty}^{\infty} dx \left[\left(\frac{Su}{59} \cdot \frac{Sv}{Sr} - \frac{Su}{8r} \cdot \frac{Sv}{59} \right) + \left(\frac{Su}{8r^*} \cdot \frac{Sv}{89^*} - \frac{Su}{89^*} \cdot \frac{Sv}{8r^*} \right) \right]$$
(25)

ここで 8/8g は、 Fréchet 後分を表れす。このとき、

$$\{ g(x), Y(x') \} = i \delta(x-x')$$

$$\{ g(x), g(x') \} = \{ Y(x), Y(x') \} = 6$$
(26)

を満足し、 る、アが Canomical set をおすことがめかる。 次に (24) を 正漢変換するが、その前に、(24)の形でよ えられる 非録形発展方程式のクラスで参えよう。

Class 1:
$$H = -(T^{(3)} + T^{(3)*})$$
 (27)
 $t \neq 3 \ t$. (24) $t \neq 3$

$$ig_t = 2rg^2 - g_{xx}$$
 , $iY_t = -2gY^2 + Y_{xx}$ 特に、 $Y = -g^*$ とまくと、

$$ig_{t} + g_{xx} + 2ig_{t}^{2}g = 0$$
 (28)

toる 非部形 Schrödingen 方程式をうる。

Class 2:
$$H = i(I_{i}^{(4)} - I_{i}^{(4)*})$$
 (29)

$$g_t = 6rgg_x - g_{xxx}$$
, $r_t = 6grr_x - r_{xxx}$

i) Y=i,8=iuとなくと

$$U_t + 6uU_x + U_{xxx} = 0 \tag{30}$$

to3 Korteweg-de Vries お程式をうる。

$$U_t + 6 U^i U_x + U_{xxx} = 0 \tag{31}$$

to 3 変形 Korteweg - de Vries 方程式をうる。

$$-$$
般に、
$$H = \sum_{n=1}^{N} (d_n I^{(n)} + C.C)$$
 (32)

が考えられ、 generalized KdV方程式等か 含まれていることが容易にめかる。

84 正準変換

散乱問題に動すれば、Potential 8.2 と散乱データがの間には一対一の関係がある。そこで 今、8.7 System

から、散むデータの頂人の正洋変換を考える。ここで、 Frédet derivative で、一般性を失うことなしに、必のように 定義する。

$$\frac{\xi f(x,\xi)}{\xi \xi(x)} = \lim_{\xi \to \infty} \frac{\xi f(x,\xi)}{\xi \xi(\xi)}$$
 (33)

この定義より、(9)式から a, bの 8, r につけての Fréchet 微分は、Tost 動砂を用いて、(neal 5につけて)

$$\frac{Sa(\xi)}{Sg(x)} = f_2g_2(x,\xi), \quad \frac{Sa(\xi)}{Sr(x)} = -f_1g_1(x,\xi) \quad (34)$$

$$\frac{8b(\xi)}{8g(x)} = -f_2\overline{g}_2(x,\xi), \quad \frac{8b(\xi)}{8r(x)} = f_1\overline{g}_1(x,\xi) \quad (35)$$

Eta3. Poisson bracket {a(\$), b(\$')} 17. (25) +1)

$$\{a(\xi),b(\xi')\}=i\int dx\left(f_{\xi}g_{z}(x,\xi)f_{t}\overline{g}_{t}(x,\xi')-f_{t}g_{t}(x,\xi')f_{z}\overline{g}_{z}(x,\xi')\right)$$

となる。 一方 (1)式より、 $\xi=\xi_1$ のとき $u^{(1)}, u^{(2)},$ $\xi=\xi_2$ のとき、 $v^{(1)}, v^{(2)}$ を 住意の解の pain とするとき

$$U_1^{(1)}U_1^{(2)}U_2^{(1)}U_2^{(2)} - U_2^{(1)}U_2^{(2)}U_1^{(2)}U_1^{(2)}$$

$$= \beta \frac{i}{2(\xi_1 - \xi_2)} \frac{\partial}{\partial x} \left[(u_1^{(i)} v_2^{(i)} - u_2^{(i)} v_1^{(i)}) (u_1^{(2)} v_2^{(2)} - u_2^{(2)} v_1^{(2)}) \right]$$

の関係かある。 このように Poisson bracket は、Tost 函数の新近解のみで与えられる。 (36) を用りりは、上式は

$$\{a(\xi), b(\xi')\} = -\{p \frac{1}{2(\xi-\xi')}a(\xi)b(\xi') + \{p \frac{1}{2(\xi-\xi')} \lim_{x\to\infty} e^{2i(\xi-\xi')x} a(\xi')b(\xi)\}$$

ここで symbol Pは主順を見れす。 又、

$$P\left(\lim_{x\to\infty}\frac{e^{i\xi x}}{\xi}\right)=i\pi\delta(\xi)$$

to3、超函改をつかって。

$$\left\{\ln a(\xi), \ln b(\xi')\right\} = \left\{P\left(-\frac{1}{2(\xi-\xi')}\right) + \frac{i\pi}{2} S(\xi-\xi')\right\}$$
(37)

を得る。 同様にして、

$$\left\{ \ln \bar{q}(\xi), \ln b(\xi') \right\} = \left\{ \frac{1}{2(\xi - \xi')} + \frac{i\pi}{2} S(\xi - \xi') \right\}$$

$$\{\ln q(\xi), \ln \overline{b}(\xi')\} = \beta \frac{1}{2(\xi-\xi')} - \frac{i\pi}{2} \delta(\xi-\xi')$$

$$\{\ln \overline{a}(\xi), \ln \overline{b}(\xi')\} = \beta\left(-\frac{1}{2(\xi-\xi')}\right) - \frac{i\pi}{2}\delta(\xi-\xi')$$

を得る。これらより、

$$P_{\xi} = \ln |a(\xi)|^{-2} \quad \text{or} \quad \overline{P_{\xi}} = \ln |\overline{a}(\xi)|^{-2}$$

$$Q_{\xi} = \frac{2}{\pi} \text{ arg } b(\xi) \quad \text{or} \quad \overline{Q_{\xi}} = -\frac{2}{\pi} \text{ arg } \overline{b}(\xi)$$
(38)

が canowcal set となることが容易にめかる。するりち、

$$\{P_{\xi}, Q_{\xi'}\} = \{\overline{P}_{\xi}, \overline{Q}_{\xi'}\} = -8(\xi - \xi')$$

$$\{P_{\xi}, \overline{P}_{\xi'}\} = \{Q_{\xi}, \overline{Q}_{\xi'}\} = 0$$
(39)

ここで、P は integral になっていることに注意せる。 bound State, $a(s_n)=0$, についても 同様に計算できる。 特に $8s_n/s_8(x)$ には、摂動炫き用いる。

$$\left(\frac{3\varphi_{1}}{3x} + i(5+85)\varphi_{1} = (8+888(x-8))\varphi_{2}$$

$$\frac{3\varphi_{2}}{3x} - i(5+85)\varphi_{2} = r\varphi_{1}$$

to3. 3→8+88 a 模功を受けた市程式を考え、心動画改 4 n 連経性と、有界性をつかって、次式をうる。

$$\frac{\delta \xi_{\text{M}}}{\delta \hat{g}(x)} = -\frac{1}{\dot{a}(\xi_{\text{m}})} f_2 g_2(\chi, \xi_{\text{m}}) \qquad (40)$$

田林に、かについて、

$$\frac{85n}{8r(x)} = \frac{1}{a(5n)} f(g, (x, 5n)) \tag{41}$$

ここで 立は ろにつりての份分と意味する。 又、

$$\frac{SCn}{SB(x)} = -f_2\overline{g}_2(x_1S_n) , \frac{SCn}{SY(x)} = f_1\overline{g}_1(x_1S_n)$$

は、明らか。 これより Poisson bracket e計算(て、 (36)式 もつかうことで、次式を得る。

$$\{5n, Cn'\} = 0$$
 $(n \neq n')$
 $\{5n, 5n'\} = \{Cn, Cn'\} = 0$
 $\{5n, Cn\} = \frac{1}{2}Cn$

これらより、

 $P_n = 5n$, $Q_n = -2 lm C_n$ (42) が Ganonical set であることが 容易にわかる。一方. a(5n) = 0 飞巻をすることで 連旋部分 ラ についての canonical set と、 (42) とが commutative であることが示せる。 ョ. $\overline{a}(5m) = 0$ n 都分についてき全く、 同様 n 結果を得る。

Pm=5m , Qm=-2 ln Cm (42)

更に、このようち canonical set (38) , (42) は

数むデータ かに同値であることが記明できる。 このようにして、数む向題は、 る、ア から、 P, Q への 正洋変換であると見ることがごきる。 そして、正洋変換は、 唇とキっことから、 医散乱向題 も マ、 正洋変換である。

多5 Canonical 変数による Hamiltonian の表現 (14) 式によいて、 Q(5) は、151→の で 20のよう ta 再近形をもっことがわかる。

$$a(\xi) \rightarrow 1$$
 as $|\xi| \rightarrow \infty$

もって 次の展開が可能である。

$$\ln a(s) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{C_{k}}{5^{k}}$$
 $I_{m} 5 \ge 0$ (44)

(22) 式で比較して、次式を得る。

現る路は、上半年面にわた、てとる。 a(5) については、bound state & cu、 薄fiff を考慮して次式で表わせる。

$$a(5) = \hat{a}(5) \prod_{n=1}^{N_1} \frac{5-5_n}{5-5_n^*}$$
 $\hat{a}(5)$: reduced function of $a(5)$

 $\alpha(5)$ は、上半平面で 曖矣で もたない、 $\alpha(5)$ と同じ解析 1性 ともつ 巫器である。 これをつか、て (45) 式を計算すると

$$H_{1} = \alpha_{R} I_{1}^{(R)} + C_{1}C$$

$$= -d_{R} \frac{(2i)^{R}}{Ti} \int_{-\infty}^{\infty} \ln |\alpha(\xi)|^{2} \cdot \xi^{R-1} d\xi$$

$$+ d_{R} \frac{(2i)^{R}}{2\pi i} \sum_{n=1}^{N_{1}} \delta_{n} \ln \frac{\xi - \xi_{n}}{\xi - \xi_{n}^{*}} \cdot \xi^{n-1} d\xi$$

ここで、 dk は、 kが 偶なのとき 純虚改、奇みでで 限数となるように運ぶ。 よって、 P.Q で、表のせば

$$H_{1}[RQ] = d_{R}(2i)^{R} \left[\frac{1}{\pi i} \left(P_{\xi} \cdot \xi^{R+1} d\xi - \sum_{n=1}^{N_{1}} \frac{P_{n}^{k} - P_{n}^{*R}}{R} \right) \right]$$
 (46)

同様にして、

$$H_{2}[\overline{P},\overline{Q}] = d_{k}(z_{i})^{k} \left[\frac{1}{\pi_{i}} \left(\overline{P}_{\xi}, \xi^{k} d\xi + \sum_{m=1}^{N_{2}} \frac{\overline{P}_{m}^{k} - \overline{P}_{m}^{k}}{k} \right) \right]$$
 (47)

を得る。これように、P.Q 変数は action angle 型のものである。 P.Q a t に 奥する action は 次の Hamiltonian How によって わばされる。

$$\frac{dP}{dt} = -\frac{SH}{8Q}, \quad \frac{dQ}{dt} = \frac{SH}{SP}$$
 (48)

=411, = a system x1"

action を ずめてみると、

P = const. (action vaniable) (49)

ではり、安全猿分可能であることが分かる。 特々 国有値

sn は (48) ((24)) の Hamiltonian How で 不変である。
前におげた、幾つかの例につけて 具体的に、PiQの

Class 1
$$H = -(I^G) + I^{(G)*})$$
, $(d_R = -1, R = 3)$ 非新的 Schrödinger 抗症式
$$S_N = \overline{S_N^*} \quad \text{time invariant}$$

$$b(t, \overline{s}) = \overline{b}^*(t, \overline{s}) = b(0, \overline{s}) \ \text{Lxp} \ (4i \ \overline{s}^2 t)$$

· Cn(t) = (x(t) = (n(0) exp (4i5i2t)

Class 2: $H = i (I^{(4)} - I^{(4)*}) \quad (d_k = i, k = 4)$

i) K-dV ħ程式

 $5n = i \, \text{Kn} : \text{time invariant} \quad \text{Kn} > 0 \text{ neal.}$ $b(t; \bar{s}) = -\overline{b}^*(t; \bar{s}) = b(0; \bar{s}) \, \text{Lyp} \, (\bar{s}; \bar{s}^3 t)$ $C_n(t) = -\overline{C_n^*}(t) = (n(0) \, \text{Lyp} \, (\bar{s} \, \text{Kn}^3 t))$

ii) M-kdV 方程式

 $5n = 5n^*$: time invariant $b(t,\xi) = \overline{b}^*(t,\xi) = b(0,\xi) \exp(8i\xi^3t)$ $c_n(t) = \overline{c_n^*(t)} = (n(0) \exp(8i\xi^3t)$

これらは、よく知られた 結果である。

References

- 1) M.J. Ablowitz, D.J. Kaup, A.C. Newell and H. Segur:

 Phys. Rev. Lett., 31 (1973) 125
- 2) V. E. Zakharov and L. D. Faddeev;
 Funct. Anal. Appl., <u>5</u> (1991) 280
- 3) V. E. Zakharov and C. V. Manakov;

 Teoret. Matem. Fiz., 19 (1974) 332

 (ここでの結果は、Prog. Theor. Phys. Vol 54 No.3 に掲載予定)